
バジリスクの宝物

ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バジリスクの宝物

【Nコード】

N1429V

【作者名】

ユウ

【あらすじ】

目隠しの青年、ヤマナカタダシ山中直
彼の友達、コカドリサ小門理沙

隠し事をしない彼ら。

しかし、直にはたった一つ秘密があった。

※この作品は他の投稿サイト、自身のホームページに掲載していません。

序章 コカトリス

「やっぱり、眼が見えないのって大変？」

そういつて、小門理沙は僕が落とした携帯電話を拾った。

「ありがとう。・・・もう慣れてるよ」

僕達は、こんな他愛ないやり取りをもう二年も続けている。

大学に入って半年くらいの時だった。

僕が研究室の前で書類をぶちまけて困っているところを助けてもらった。

それから彼女とは仲がいい。

一緒に食事をとったり、講義を聞いたり。

カラオケに行った時は感心されたりもした。

歌詞も見ずによく歌えるもんだ、と。

彼女は僕のよき理解者だ。

僕の相手をしてくれること。

発言がストレートなこと。

僕が自分でやりたいことを見つけた時は、そっと陰から応援してくれること。

僕は余り気を使われるのが好きではない。

彼女との絶妙な距離感が、僕は大好きだ。

彼女は何だって僕に話してくれた。

僕も何かがあれば真っ先に彼女に相談する。

僕たちの間に隠し事は存在しない。

ただ一つ、僕は眼が見えない、という嘘を除いて。

第一章 イヴァルアイ

僕が十歳になる誕生日の日のこと。

僕は頭が痛くて学校を早退した。

家に帰ると、母が夕食を作っていた。

誕生日だからと、早いうちから支度をしていたのだ。

僕は頭が痛いから少し寝ると、自分の部屋へ向かった。

ベッドにしばらく転がっていたが、痛みは治まるどころか、徐々に激しくなっていた。

時折、母が様子を見に来たり、薬を置いて行ったりしていたが、よく覚えていない。

頭が痛い。こめかみ。眉間。眼の奥の方。

燃える様に熱かった。

苦しみ疲れて、僕はいつしか眠りに落ちていた。

起きた時、頭に痛みはなくすっきりしていた。

台所の方からは、まだ料理の音が続いていた。

記念すべき、僕の十回目の誕生日。

今日のご飯は何だろう。

僕は台所へ向かった。

先程までの激痛のことなどすっかり忘れ去っていた。

台所へ行くと、リズムよくフライパンを揺する母を見つけた。

「お母さん、今日は何作るの？」

次の瞬間、母は小刻みに震え出し、そして倒れた。

「どうしたの！？」

僕が駆け寄った時には既に母は息絶えていた。

とにかく、誰かを呼ばなくちゃ。幼い僕はそう思い、隣の家まで走った。

僕が住んでいたところはかなりの田舎で、隣の家といってもそこそこ距離があった。

近所付き合ひも昔からよくあり、その家のおじさんには良くしてもらっていた。

家族に相談出来ないことは、よくおじさんに話していた。

おじさんの家に着いた。

家の扉を乱暴に叩く。

「おじさん！ おじさん！ たすけて！！」

家の中からおじさんの声と走ってくる音が聞こえた。

「直か！？ すぐ行くぞ！！」

本当にすぐに扉は空いた。

しかし、おじさんの顔を見て安心したのも束の間だった。

「どうしたんだ！ なにがあっ・・・」

おじさんはそこまで言うとお倒れてしまった。

いよいよ僕は訳が分からなくなって、とにかくそこらじゅうの知り合いの家を訪ねて回った。

訪ねて回った全ての家で、反応は同じだった。

みんな倒れた。途中ですれ違った人も死んだ。

犬も猫も鳥も、みんなバタバタと斃れた。

僕の慟哭だけが静まり返った村に大きく響いていた。

第二章 ヤマカガシ

僕は山中直。現在大学で近現代文学を専攻している。

六年ほど前に故郷を離れ、今は悠々自適な一人暮らしだ。

しかし、僕は眼が見えない、ということになっているので、大学では苦勞が絶えない。

講義中に出される課題には、常に友達の協力がいる。

問題文を読み上げてもらわないとわからないのだ。

点字は多少読めるようになったが、点字付きのテキストなど無いのであまり意味はない。

そのあたり、僕はものすごく理沙の世話になっている。

彼女は可能な限り僕の隣に座り、ぼそぼそと耳打ちをしてくれる。

その上頭もいいので、わからないことは教授より理沙に聞くことの方が多い。

彼女の協力なしでは卒業も危ういだろう。

昼休み。

僕はいつものように理沙と昼食をとる。

「レポートめんどくさいなー」

「あんまり時間かからなかったよ、アレ」

「もう終わったの？ 眼が見えないのにがんばるなあ」

「あとでチェックお願いできる？ 打ち間違いがあるかも」

「いいよー。ついでだからちょこつと写さしてね」

こんなやり取りもいつものこと。

「次の講義は・・・3号館だったね。そろそろ移動しないと間に合わないか」

「そうだね、行こうーっつ」

眼の奥に痛みが走った。

「どうしたの？」

理沙は僕に聞く。

「何でもない。気にしないで」

「ふーん。ならいいけど・・・」

第三章 カエル

日曜日。僕は理沙と遊園地に来ていた。

眼が見えなくてもジェットコースターには乗れるでしょ、と誘われたのだ。

彼女は僕の眼のことを気にかけてはいるが、それ以外のことは全て普通に接してくれる。

移動する時は理沙の右肩に僕の右手を乗せ、後ろをついていくように歩く。

これなら誰にもぶつからない。

楽しい時間は速く感じるもので、とっくに日は暮れ、辺りは薄暗くなっている（らしい）。

帰り道。

人通りもあまりなかったので、僕の場所は理沙の後ろから横になっていた。

眼は開けない。手をつないでいた。

うん。すごくドキドキする。

これって恋人同士に見えるよね？

ぶっちゃけた話、僕は理沙が好きだ。

振られるのが怖くて告白をしていない腰ぬけ野郎ということ。

顔は見たことないけどきつと可愛いんだろうな、とか声は好きだな、なんて妄想をしている間に――

何かにぶつかった。

「痛えなオイ！ 何処見て歩いてんだクソガキ！！」

人にぶつかってしまったらしい。

「すみませんでした」

理沙が謝る声が聞こえる。

僕も頭を下げる。

「すみませんじゃすまねえんだよ！」

「オイオイ、骨折れちゃってんじゃねーのコレ」

「どうしてくれんだよ！」

声から判断するに三人。酒臭い。酔っ払いかよ面倒くせえ。

そして一人が気付いてしまった。

「こいつ、眼隠しなんかしてるよ」

後の二人も便乗する。

「そんなもん付けてっからぶつかんだよ」

「取っちゃえ、取っちゃえ」

やめろ。それだけはやっちゃいけない。

僕から眼隠しが離れる。

僕はギュツと眼を瞑る。

「おい、目え開けろよ」

嫌だ。

「やめて！」

理沙が叫ぶ。

「うるせえ！ 引っこんでろ！」

「きゃっ・・・」

ドサツと倒れる音がした。

「理沙!？」

―その拍子に。僕は眼を開けてしまった。

絡んできた三人をしっかりと見てしまった―

三人は倒れ、動かない。

突き飛ばされていた理沙が視界に入ることにはなかった。

僕は眼隠しを奪い返すと素早く付け直す。

「理沙! 何処だ! 逃げよう!」

「ここだよ!」

理沙の手が僕の手を握る。

僕たち急いでその場を後にした。

「男性三人、路上で変死」

次の日の新聞の見出しはこうだった。

「あの三人、何で死んだんだろう・・・」

理沙が憂鬱そうな声で僕に尋ねた。

「さあ？ 急性アル中じゃないの？」

「そう・・・だね。私たちのせいじゃないよね？」

「もしそうだったとしても、気にしないでいいよ。絡んできたのは向こうだし、理沙だって突き飛ばされたじゃないか」

「うん・・・」

「悩んだって仕方がないよ。じゃあ、また明日」

一人になると考え込んでしまう。

いくら相手が悪いと言っても。

あれは―あの三人が死んだのは―

僕が彼らを見てしまった所為だ。

第四章 イタチ

村の呪い師は、この眼を魔眼まじなと呼んだか。

見たものを殺す眼、とか何とか。

頼る当てもなく、一人で泣いていたところをいきなり眼隠しされ、この話を聞かされた。

戸惑う僕に呪い師は言った。

眼を閉じていろと。

そうすれば、怖いことはもう起こらないからと。

それ以来、僕はその呪い師の世話になった。

呪い師は名前を伊達鏡子ダテキョウコといった。

70過ぎの老婆だ。一緒に暮らし始めてから婆ちゃんと呼んでいる（実の祖母はすでに他界している）。

代々この村で呪い事を生業としていたらしく（僕は会ったことが無かったが）祭りや祝い事にはちよくちよく顔を出していたという。

村の人達が死んだとき、その様子を見ていた他の村人から話を聞き、魔眼という結論に至ったそうだ。

魔眼の伝承は結構有名で、それに纏わる話や僕の眼の事もわかった（検証するわけにもいかないので、あくまで可能性の話だが）。

魔眼は邪眼、悪魔の眼とも呼ばれ、伝承地によってさまざまな能力が伝えられるが、大凡の共通項は見られたものに災禍を齎すこと。

有名な物を一つ挙げるとするなら、ギリシャ神話のメドゥーサだろう。彼女は見たものを石に変える魔眼を持っていたらしい。

魔眼を見る、ではなく魔眼に見られることが原因であるので、魔眼をもった生き物（つまり、ここでは僕だ）が眼を開かない限り、害はない。

以来、僕の眼は見えないことになっている。

しかし、口に戸は立てられぬとはよく言ったもので、魔眼の噂はすぐに広まった。

辛かった。

いじめられたのではない。

魔眼を怖れて誰も僕の正面には立たなくなった。

みんな僕を怖がったのだ。

眼隠しをしているにも関わらず学校の席は常に一番前だったし、先生も僕の正面に立とうとしなかったことは気配で分かった。

そう言えば、身長は高いほうのはずなのに背の順でも一番前だった

なあ。

よく婆ちゃんに泣きついていた。言ったところでどうしようもないことを、ぶつけていた。

婆ちゃんはいつだって僕の話を実剣に聞いてくれた。

一度だけ、中学の時だったか、自暴自棄になっていた僕は耐え切れずに泣きながら怒鳴った。

「眼を潰して！ どうせ何も見れないんなら、こんな眼いらない！」

次の瞬間、頬にビンタが飛んできた。

初めて婆ちゃんにぶたれた。吃驚して涙も止まった。

「ふざけんじゃないよ！」

驚くほど痛くて、婆ちゃんが本気でぶったことはすぐに分かった。

「あんたが何をしたって言うんだい。たまたま魔眼だっただけじゃないか。それで何か悪さでもしようとしたのかい？ 違うだろう？ あんたの眼は見えるんだ。せつかく授かった眼を無暗に潰すだなんてお言いでないよ！」

いつも冷静な婆ちゃんがここまで激昂するのは初めてだった。

怒っているのか悲しんでいるのかはわからなかったが、声が震えていた。

暫しの沈黙を挟んで婆ちゃんは言った。

「その眼は・・・」

・・・

「その眼は大切にしておくんだよ。いつか本当に大切なものを見つ
けるために・・・」

婆ちゃんは立ち上がった。

「魔眼なんかに負けるんじゃないよ」

一人つきりになったあと、僕はこっそり泣いた。

中学卒業と同時に僕は村を出た。

やっぱり村では暮らしにくかったし、実は婆ちゃんも僕を追い出す
ように村人から迫られていたらしいのだ。

もちろん婆ちゃんはそんなことを口には出さなかったし、ずっと変
わらず僕の世話をしてくれていたけど、僕のことでもう迷惑はかけ
たくないって思っていたので、それも村を出る決意の一要因になっ
た。

村を出る日。駅まで見送りに来ていたのは、やっぱり婆ちゃん一人
だった。

「無理するでないよ。辛くなったらいつでも帰ってきていいんだからね」

「わかった。ありがとね。頑張ってみるよ」

高校は婆ちゃんの伝手で盲学校に入った。眼が見えなくても気にしなくていいので、僕の高校生活の三年は平凡そのものだった。

第五章 イクネウモーン 前編

「やっぱり何かおかしいよ」

夕食を食べている最中、突如理沙はそう切り出した。

「何がだよ・・・」

僕はもう嫌な予感しかない。

「変死した三人」

やっぱりな・・・

「突然三人同時にアル中なんてありえない」

「ありえないけど、実際にあったことだ」

「あの時、何があったかしら。直の眼隠しを取って、それから私を突き飛ばして・・・」

まずい。

「わかった。直、あんた・・・」

ごくり。

「眼隠しに毒をぬってたのね！」

「それだと俺も死ぬだろ」

「そっか」

一瞬焦ったが、普通に考えるとこの辺りが限界だろう。

「そもそも、なんで眼隠しなの？」

「は？」

心臓が止まるかと思った。まさか僕の眼の方向で話を広げてくるのは。

どうにか話をずらさないか。

「普通眼が悪い人ってサングラスとかじゃない？ 眼帯とか」

「眼球じゃなくて眼のあたり全体が悪いんだよ。あまり外気に晒すなって言われてる」

「そんな病気なんだ」

かなり苦しい言い訳だったが、彼女はそれで納得したらしい。

その日はそれ以上何も聞いてこなかった。

二日後。今日は講義が休みだったので、町はずれを散歩していた。

さすがに街で眼隠しを取るわけにもいかないの、杖を使っている。あとはひたすら感覚器官に意識を集中させれば、意外と大抵のことは出来る。

人の気配を感じる。歩く音を聞く。風を受ければ、その方向に何もないことが分かる。

歩きなれた街なら十分散歩も楽しめる。

理沙はいない。僕とは違う講義を取っていることもあるので当然と言えば当然だが、少し寂しい。

僕としてはずっと一緒に居たいくらいだが、理沙には理沙の生活があるのだ。四六時中一緒というわけにもいかない。

今日のところは一人で楽しむことにする。

一時間ほど歩いた頃、ふと涼しい空気を感じた。

この辺りは確か、山があったはず。

「久しぶりに山登りしてみるか」

僕はよく部屋で地図を見ている。部屋を出てしまうと眼が使えないので、頭の中に地図をたたき込んでおくのだ。

自分の歩いた距離と方向は何となく感覚でわかるので、今自分が何処に居るのか大体の見当はつく。

「この辺りの山はそんなに険しくはなかったな。高くもないし、ハイキングにはもってこいだ」

そうと決めたら即実行だ。一人の時は一人で出来ることを楽しもう。

山道に足を踏み入れる。

足に意識を集中させると、土の反発がよくわかる。田舎育ちだからだろうか。

人が歩いた轍をたどり登っていく。

平日の昼間からこんな山に人はいないだろう。

時折眼隠しをずらして足元を確認する。

そのたびに蟻や団子虫を殺してしまうのは忍びないが。

山道を登りながら、僕は自分の眼について考えていた。

今更、何故こんな眼になったかを考えているのではない。

これからどうするかということだ。

どうしようもないのだが。

婆ちゃんからいろんな伝承を聞いたが、ただの人間に魔眼が宿った

という話はなかった。

多くは魔眼を持つ魔物を退治する話だ。魔眼に対抗する手段はあれど治す手段は無し。

魔眼が伝説中の代物なら治療法もあったとして伝説級だろう。

実際、僕が魔眼を持っているのだから、伝説級でも出来る気がしなくもないのだが。

まあ、難しいところである。

結局今のライフスタイルで落ち着くことになりそうだ。

今の生活も気に入っている。余り不自由は感じない。

理沙が居れば。理沙さえ居てくれるなら、僕は他に求めるものなど何もない。

第五章 イクネウモーン 後編

一人暮らしを始めてからわかったことがいくつかある。

まず、魔眼は直接でなくても効果を発揮してしまう。

一番の大問題だ。

一人暮らしを始めたころ、僕は一本の映画を見た。

深夜に放映していた、いかにもB級といった感じの映画だ。

ピラミッドに眠る宝を盗賊達が盗もうとするが、呪いで一人残らず死んでしまう、という如何にもな内容だった。

翌日、ニュースでこの映画の出演者全員が死んだと知った。ニュースキャスターは画面に映っていなかったので多分死んでいない。

この映画は本当に呪われているということになって、二度と放映されることはなかった。所謂お蔵入りだ。

この事実が示しているのはつまり、映像だろうが写真だろうが、僕が見てしまうとその対象者は死ぬということだ。

以来、映画は古い作品しか見ていない。対象者が既に死んでいるなら問題はないのだ。

僕が大学に来てから若干アニメオタクになりつつあるのも、この辺

に問題があると睨んでいる。

次に全身を隠しているなら効果はないということ。

生身の部分を一部分でも見ると殺してしまうのだが、着ぐるみや箱に入っている人は大丈夫（透明はダメ）。

この仮説には自信があったので、遊園地に行った時こっそり試したのだ。要は僕の視線が相手の生身に届かなければいいらしい。

ということは、マジックミラー越しなら魔眼と見つめあっても問題はないことになる。しかし、わかったところで誰がそんなことをするのか。

そして、はっきり確認できる距離に居ないと魔眼の効果はない。遠くに見える人影程度では死なないのだ。

この辺りは結構いいかげんで、僕にも基準が分からない。

「色がはっきりと識別できる範囲」が基準だと思っているが、こればかりは検証する気にもなれない。

眼隠しをしていない時に人影が向かってきたら、僕が目をつぶってやり過ぎるか、まわれ右して遠ざかるしかない。

わかったことがあればわからないままのこともある。

魔眼は自分自身に効くのかどうか。

自分の手足を見ても死んでいないから、おそらくは大丈夫なのだろう。

う。

しかし、鏡で自分と向き合う勇氣はない。もし効くのなら、僕はそこで死ぬことになる。

それに魔眼をもつ魔物と対峙する時はいつだって鏡がつきものだ。用心するに越したことはない。

あれこれ考えているうちに頂上近くまで登ってきていたようだ。

風がよく通っている。近くに展望台でもあるのだろう。

体を感じる太陽の光は既に夕方だ。

周りに人の気配は感じなかった。

「誰かいますかー!？」

大声で叫ぶ。返事はない。

「よし」

僕は目隠しを取り、ゆっくりと目を開く。

「すっげえ・・・」

目を開けると幻想的な景色が広がっていた。

太陽は西の空。街は黄昏に染まっている。

遠くに見える海がキラキラと眩しい。

車、電車、船。遠くから見るとこんなにも美しいのか。

景色が動いている。その全てに人が乗っているのだと思うと、なんだか少し胸が苦しくなった。

なんて命にあふれた風景だろう。視界全体から生命力を感じる。

ここ数年、僕の視界に生きている物はいなかった。でもここからなら生きている街を見ることができる。

ふと、理沙のことを思い出した。

「この景色、理沙にも見せたいな」

そのまま、景色に見惚れてぼーっとしていた。

「そろそろ帰るか・・・」

いつか理沙と一緒に来よう。誘う理由は風が気持ちいいとかでいいだろう。

僕は目隠しを付け直そうと頭に手をやった。

その時。

「直・・・？」

理沙の声。なんでこんな所にいるんだ？

第六章 ヘンルーダ 前編

「いたっ」

今日は一段と頭痛がひどい。

3日前、理沙と別れてからずっとだ。

これが目のせいなのか、疲れからなのかわからない。

この3日、僕は部屋から出なかった。出られなかった。

理沙と会う勇気がなかったのだ。

はあ。なんでこんなことに。

～回想～

「理沙か？」

「うん」

「何してんだ？」

「こっちのセリフ」

「・・・。散歩だ」

「眼・・・見えるの？」

「いつから居たんだ？」

「私の質問に答えて」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「あなたが山に入った時・・・」

「声をかけてくれればよかったのに」

「そうしようかとも思ったけど、直がどんどん先に行っちゃうから」

「・・・」

「時々、目隠しずらしてたよね」

「・・・」

「見えるの？」

「・・・」

「嘘をついてたの？」

「最近良くなったんだ。でもまだ慣れないから訓練してた。完全に回復したら理沙に言おうと」

「嘘」

「理沙に嘘なんかつかない」

「それも嘘ね。じゃあ眼隠しとってよ」

「出来ない」

「なんで？」

「出来ないんだ」

「・・・」

「・・・」

「・・・そう。私帰るね」

理沙の小さな足音が遠くなる。

言えない。言えるわけがない。

誰が信じられるんだ、こんな眼のこと。

それに。

言ってしまったら。

理沙は僕の前に二度と立たない。

く回想終く

引き籠ってから7日がたった。

僕は未だに部屋の中でまるまっている。

理沙からの連絡もない。

やっぱり嫌われたのだろうか。

このまま二度と会えないのだろうか。

でも、会って何を話すと言うのか。

いつそこの眼を本当に潰してしまおうか。

頭が痛い。

ベッドの上に転がっていたらいつのまにか寝てしまっていたようだ。

時計は午後5時を指している。あんな事が無ければ、この時間は理沙と二人で夕食を食べる場所を探している筈だ。

はあ。

溜息しか出てこない。

コンコン。

誰かがドアを叩いている。今は出る気にならない。

ゴンゴンッ。

うるさいなあ。僕は出たくないんだ。

バンッバンッ。

しつこい。それに豪くノックが乱暴だ。

「チッ」

しかたなく出ることにする。

目隠しをつけ玄関に移動するその間も、乱暴なノックは続いていた。

「誰ですか、乱暴だなあ」

鍵を開けドアノブを回す。

―と同時にドアが飛んできた。

乱暴な訪問者はドアを渾身の力で蹴っ飛ばしたらしい。

僕の部屋は日本の住宅にしては珍しく内開きなのだ。

「いっつてえ」

何しやがんだ、このボk

「こおの、ツボケナスがあ!!!」

聞き慣れた声。だけどいつもと様子が違う。

なんだか、ドスがきいているような。

「り、理沙!？」

どんなにいつもと違って、この声だけは聞き間違えることはない。

理沙の声だ。たった一週間なのに懐かしいと思っ

「どれだけ心配さんのよ!」

「ええ!？」

突然現れた理沙はずかずかと僕の部屋に上がり込んできた。

僕を何度も小突きながら。

僕は後退を繰り返し、ベッドの前辺りまで戻されてしまった。

理沙は僕の胸倉を掴む。

「あんたが悩んでるみたいだったから！ そっとしておいたら付け上がりやがってえええ！！！」

「だ、だって」

今まで聞いたこともない粗暴な口調に僕はたじろぐ。

「だってクソもあるか！ 今日で1週間、いつまでウジウジしてるの！」

僕を壁に押し付け締め上げる。

「ちょっと・・・苦じ・・・」

「なんとか言いなさいよ！」

理沙は乱暴に僕を揺さぶる。壁に何度も頭をぶつけた。

「ちょ、やめ。目隠しが・・・」

「あんた、何隠してんの？」

「・・・」

第六章 ヘンルーダ 後編

やっぱり、理沙に嘘はつけなかった。

僕は全てを話した。

自分に起きたこと。

理沙に嘘をついていたこと。

魔眼のことを。

見たものを全て殺す、この眼のことを。

話している最中、理沙は黙って聞いていた。

これで終わった。大学生活も、理沙のことも。

僕が話し終わって、少し間をおいてから理沙が言った。

「そう。そういうことだったの」

「え……？ 信じてくれるの？」

「嘘なの？」

「本当だけど……」

「信じるよ」

「何で・・・」

「あなたが私に嘘をついたことがあったっけ？」

「無い」

眼のことを除けば、だけど。

「直の言うことだもん、全部信じる」

「・・・」

「・・・どうかした？」

「ごめん」

「なんでごめんなの」

僕は決心した。こんな僕を信じてくれる人を危険な目に遭わせたくない。

さみしいけれど―お別れだ。

「僕のことを信じてくれるなら尚更だ。理沙を殺したくない」

「うん」

「だから」

「だから？」

「もう、僕に近付かないで」

ビンタが飛んできた。

「ふざけんな！」

驚くほど痛くて、理沙が本気でぶったことはすぐに分かった。

「私は何であなたの言うことを信じたと思ってるの！？ あなたと一緒に居たいからでしょう！？ あなたは私を殺そうとしたの？ そんなことないでしょう？ 私が死ななくてあなたはいいでしょうけど、私の気持ちは何処に行くの！？ 勝手な事言わないで！」

理沙の声は震えている。

泣いているのか？

「私はもう直のそばに居ちゃいけないの・・・？」

「ごめん」

理沙の小さな嗚咽が部屋に響く。

「泣かないで」

「直だって、泣いてるじゃない・・・」

最後に泣いたのも、ぶたれたときだっけ。

僕の眼はその時以上の涙を流していた。

大量の涙は、目隠しからも零れ出て頬を伝う。

悲しいんじゃない。

辛いんじゃない。

苦しいんじゃない。

痛いんじゃない。

嬉しかった。

僕の眼が呪われていると知ってなお、僕と一緒に居てくれると言う。

どうしようもない嘘をついていた僕の、そばに居たいと言う。

涙が止まらなかった。

僕たちは互いの体をしっかりと抱き寄せた。

お互い泣き止んで、僕は理沙に話しかける。

「僕、もう君に嘘をつかない。何があっても」

「当たり前よ」

「ホントに一緒に居てくれる？」

「私があなただに嘘をついたことがあったっけ？」

「無い」

僕たちは笑う。

「わかったら、ほら、晩御飯食べに行くわよ」

理沙は立ち上がり、玄関へ向かおうとする。

「ありがとう」

どれだけ言葉を並べても足りないほどの感謝を、この陳腐な言葉に乗せて放った。

「はいはい」

子供を遇うような返事。

彼女なりの照れ隠しだと、僕は知っている。

「ねえ、理沙」

どうしても、言っておきたいことがあった。

「今度は何よ？」

「僕、君のことが好きだ」

「・・・。知ってるわ」

終章 バジリスク

僕は山中直。現在大学で教師になるための勉強をしている。

悠々自適な一人暮らしだったが、今はめったに一人で部屋に居ることはない。

「ただいまー」

部屋に入ってきたのは小門理沙。

僕の恋人、最愛の人だ。

よく僕の部屋に遊びに来る。というかほぼ毎日だが。

「お、やってるやってる」

真後ろに彼女の気配を感じる。

僕が呼んでいる本を覗き込んでいるらしい。

「ってあんまり進んでないね」

「まだ慣れてないから」

「二人の時くらい、目隠し外せばいいのに」

「やーだー」

僕が呼んでいるのは点字で書かれたテキスト。

探してみると以外にあるもんだ。

「私、お昼ご飯作ってるから。勉強頑張ってね」

理沙の足音は台所の方へ。

「今日はパスタにしようかな」

楽しそうな声。

理沙と一緒に泣いたあの日から、僕は一度も眼を開いていない。

理沙を危険に晒したくなかったし、この眼に頼らなくても出来ることはたくさんあった。

本当は見えるということに、僕がどれだけ胡坐をかいていたか今ならわかる。

時々、ふと思うのだ。

あの眼は。

僕に世界を見せてくれたのだと。

十歳で光を失った僕に魔眼を貸してくれたのではないか。

全く眼を使わなくなって、あの頭痛は無くなった。

きつと、僕が何も見ない世界で生きていけると確信して眠りについたのだ。

バジリスク。婆ちゃんから聞いたことがある。

名前の意味は「小さき蛇の王」。

彼の眼はあらゆる生物を殺し、その一瞥は岩をも砕いた。

果実は腐って落ち、草花は燃え上がる。水を飲めば以降百年、川は毒と化したという。

砂漠に棲むと言われるが、彼が棲む場所が砂漠になるのだ。

砂の海で一人、彼は何を思っただろう。

僕の瞳の中で、一人ぼっちの王様は何を見たんだろう。

彼と僕が引き起こしたことは、どうやって取り返しはつかない。

僕と理沙の心には、決して癒えることのない深い傷が残った。

しかし。

もう彼を嫌悪し、怖れ慄くことはない。

―決して安い代償ではなかったが―

厄介な奴だったが、僕は彼のおかげで宝物を知った。

もう彼に寄り掛かることはない。

安心して眠れ、バジリスク。

僕が眼を開くことは二度とない。

僕には愛し合う人がいるから。

僕が眼を開きたいと思うことはない。

僕の代わりに世界を見てくれる人がいるから。

見えなくても、感じるものがある。

見えないから、見つけた人がいる。

僕の何よりも大切な人。

昼下がり。

部屋にはかすかなバジルの香り。

開け放した窓から気持ちの良い風。

「散歩にいこう」

「何処へ？」

「理沙に見せたいものがあるんだ」

—終—

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1429v/>

バジリスクの宝物

2011年10月9日09時23分発行